

## 野球太郎ストーリーズ



に変わるケースがある。金本知憲(元広島ほか)を育て、藤原が憧れる柳田悠岐(ソフトバンク)も高校野球引退直後に通い体作りの基礎知識を学んだジム「アスリート」(広島市)の代表、平岡洋二氏を取材した際、繰り返し伝えてきたフレーズがある。それは「野球選手は技術、技術となりがちだが、多くの選手が変わるのは体が変わった時」。確かに金本も、柳田も劇的なスケールアップには、以前とは別人の鋼のような肉体を手に入れたことが大きかった。ドラフト当日、藤原の体重は夏と同じ80キロ。この先の体作りや目指

す体型について聞くところ言った。「85キロに早く持っていていきたい。ただ、体が重くなると持ち味のスピードが落ちるとダメなので、そのあたりも見ながら少しずつ増やしていきたいです」

もちろんその通りで、大事なのは増やし方だ。平岡氏はプロ入団時、藤原よりはるかに細かった大卒の金本が肉体改造に励んだ当時を振り返り、こうも言っていた。「鍛えながら筋肉で体重を増やして、彼が広島時代で一番重くなったのが2000年。でも、この年にトリプルスリーを達成して盗塁も自身最高の30個。鍛えて増やせば、動きは悪くならないどころかスピードもパワーも増すんです」

### 打撃を固めてから1軍に

この魅力的なゴールデンドルキーをロツテはどう扱うのか。高卒野手は基本的に2〜4年、ファームで打撃の形を固めてからの1軍という流れが、大きく伸びるパター

ンだと思っている。僕の中では学習能力の高さ、環境面への対応力、ストリートに負けない振りの強さ、遊撃の守り……。総合的に考え、根尾は開幕スタメンも十分にありと見るが、藤原はファームで鍛え3年目から1軍レギュラー。そんな青写真が浮かんでいる。確かに足もあり、守備範囲も広い。まして井口ロツテはスピードを売りにしている。藤原はそんなチームの核となりうる選手で、少々無理をしても1軍で使いたくなるかもしれない。ただ、打撃面を考えれば、やはりファームでしっかり作ってから、と思う。

この先、様々な理論も学びながらどんな肉体になっていくのか。ユニフォームに包まれた中、も想像し楽しんでいきたい。

## ライターズメモ

2017年のセンバツ前。某出版社が各選手に行ったアンケートの中に遠投距離を記す欄があった。取材時に目を落とすと、藤原の遠投欄には本人の記入で「180」。橋本翔太郎コーチに笑って伝えると「来年はそれくらい投げられるようになるってことじゃないですか!」。記入時の凡ミスではあったが妙に藤原らしいエピソードとして今も頭に残っている。

藤原は先述した通り振って振って作ってきたタイプで、今はまだまだ途上だ。これが1軍に入ると毎日が試合で、どうしても個人練習の時間は限られる。結果、大きく伸びる、何かをしっかりとつかむ時間を失ってしまう……。例えばオリックスの後藤駿太。1年目に開幕スタメンに名を連ねたが、打撃面でもがくシーズンが続いた。西武の炭谷銀仁朗にしても、1年目に高卒捕手としては51年ぶりの開幕スタメン出場。直後に満塁ホ

ームランも放ち、城島健司(元アイエーほか)の再来と騒がれたが以降、打撃面では伸び悩んだ。技術の問題は問題として、そこに取り組む時間も含め、18歳で1軍の戦いに混じった代償の大きさを感じた。

19歳、20歳の頃に身につけるべきものを身につけるための時間を過す大切さ。ただ、すべては結果論であり、個人の能力、対応力次第。果たして藤原はどうか。こんな心配などお構いなし、プレースタイル同様、颯爽と様々な壁をクリアして羽ばたき、やっぱり藤原か、となるのか。来季、どこでプレーするにしろ、右肩上がりの成長力を引き続き發揮しての1年目になることを願っている。